

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 5 月 26 日現在

機関番号：34312

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25350305

研究課題名(和文) コミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) Development and Evaluation of a Learning Program for Vocal Recognition and Expression to Improve Communication Skills

研究代表者

平野 美保 (HIRANO, Miho)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号：40631411

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：関連の知見を参考に、大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムを設計した。この学習プログラムでは、音声表現に関する知識の獲得、音声表現に関する知識の活用(音声行動の改善)、他者に配慮した話し方の意識の向上、人前で話すことについての苦手意識の克服、自己主導性の向上、協調性の向上の6点を学習目標とし、ICEモデルや協同学習などを導入した。本学習プログラムを大学生に実施し、その学習者の中から15名に、それぞれ3回のインタビュー調査をし、質的に分析をした。

研究成果の概要(英文)：We designed a vocal recognition and expression learning program to improve university students' communication skills based on relevant insights. The program is intended to achieve six goals: acquire knowledge about vocal recognition and expression, utilize the acquired knowledge (for better speaking behavior), raise awareness of speech that is considerate to others, overcome a fear of speaking in public, improve self-directedness, and improve cooperativeness. The program adopts the ICE (ideas, connections, and extensions) model and cooperative learning approach. Of the students who participated in this program, 15 were interviewed three times for each qualitative analysis.

研究分野：教育工学

キーワード：音声表現スキル コミュニケーション能力育成 学習プログラム開発 評価 キャリア教育

### 1. 研究開始当初の背景

従来、日本人は公的場面でのスピーチ・コミュニケーションを苦手としてきた。しかし、グローバル化する現代社会において、世界に伍して自身の意見を対面で表現する能力の育成が求められている。大学においてもプレゼンテーション能力が重要視されつつも口頭表現については教育が十分ではなく、さらに、音声は見過ごされる傾向にある。その結果、聞きづらくわかりにくい話し方であったり、苦手意識から自信がなかったりするために、例えば職業社会への接続(就職面接など)がうまくいかない場合がある。音声表現スキルの育成は、人前で話すことの苦手意識の克服や、聞き取りやすさ、理解のしやすさなどの聞き手に配慮した話し方等、スピーチ・コミュニケーションの基礎能力の向上に役立つものであり、職業場面への接続の問題解決の一つに資するものである。

また、口頭表現に関する実践的な研究は、スピーチ演習や指導方法の開発、成果の報告などが若干みられるものの、内容や方法については十分に検討されてきていなかった。そのため報告者は、これまでパラ言語スキル育成のための音声行動学習プログラムを開発し、実施の上、分析・評価をしてきた。なお、ここでいうパラ言語とは、発話の意図(発話速度、間等)や話者の心的態度に関するもの(明るさ・暗さ等の声のトーン、語尾等のイントネーション等)のことである。

音声行動学習プログラムの実施によって、( )大学生と社会人とは、パラ言語に関する意識と行動について相違がみられ、大学生に適した内容・方法で支援する必要があること、( )学習プログラムの実施によって、音声行動に肯定的な変化がみられたり、自己の問題・課題への気付きが促進されたりすること、( )パラ言語に焦点化した本学習プログラムの学習形態に関して、学習者間での演習では、とくに行動面で肯定的な変化に結び付きやすい傾向があること、( )指導者が学習者の羞恥心・緊張感・抵抗感などの心理感情的障壁の除去に配慮する必要があることなどが明らかになった。

そのため、これまでの研究を発展させた大学生に適した育成内容・方法についての研究が必要であり、筆者が開発してきた音声行動学習プログラムを再構築し、実施の上、検討していく必要がある。そのため本研究を進めてきた。

### 2. 研究の目的

本研究は、音声表現スキルの育成に注目し、大学生に対するスピーチ・コミュニケーション能力を向上させる教育・学習の具体的方法の開発を目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究を、主に次の2つの方法で実施した。

(1) 大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの設計に向けて、関連の知見から示唆を得る方法で実施した。

音声(パラ言語)に焦点化した個別学習教材( .教材の説明と動機づけ、 .改善のポイントと練習方法、 .まとめ:今後への動機づけ、ポイントの復習)を大学生に視聴してもらい、視聴前後のアンケート調査、および大学生の音声行動について第三者である専門家の評価を行い、それを通して、大学生の音声表現の学習に関する意識と行動に関する知見を得る。

キャリア教育の視点から、大学生に対するコミュニケーションスキル育成のための支援方法を整理し、コミュニケーションスキル育成に関して考察することを通して、支援方法に関しての知見を得る。

(2) 実社会に資する大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムを、関連の知見を参考に設計し、この学習プログラムを実施した。また、本学習プログラムの学習前および学習後に、学習者に対してインタビュー調査(半構造化面接)を実施し、さらに3~4か月後に、同じ学習者に対して追跡調査(半構造化面接)を実施した。このことを通して学習者の音声表現や学習プログラムに関する認知面、感情面、行動面についての効果を質的に分析し、学習プログラムを評価した。

### 4. 研究成果

(1) 大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの設計に向けて、次の通り知見を得た。

大学生は、学習前であっても話し方に関して学習意欲が高いことが考えられた。また、本個別学習教材は、学習者にとって既知のことが多いことが推察された。しかし、本個別学習教材の学習によって、音声表現の相違による印象の違いの再認識や、音声行動改善への意欲の向上などの効果がみられた。音声に関することは普段意識にのぼらないことが考えられるため、パラ言語に焦点化した本個別学習教材が再認識する機会になっていたことが推察された。

学習者の学習前後の音声行動に関する専門家評価では、おおむね肯定的な変化がみられた。すなわち、本教材のように、学習者にとって基礎的で既知の内容であっても、パラ言語に関する学習は話のわかりやすさや印象において肯定的な効果をもたらすことが推察された(平野・柴田 2015)。

まず、大学生に対するコミュニケーションスキルの育成のために、実社会において

大学生に求められている能力について整理した。次に、キャリア教育において学習効果が期待される育成方法について整理し考察した。主に、アクティブラーニング型授業の技法の中で、協同学習、LTD( Learning through Discussion ) 話し合い学習法、PBL(Problem-Based Learning および Project-Based Learning)、反転授業、ICE モデルについて整理した。アクティブラーニング型の授業を採用している授業者はファシリテーターであることが必要であり、ファシリテーターとして、学生の力を引き出し、自律的に行動できるよう支援していく必要性が考えられた。最後に、これらを踏まえて、コミュニケーションスキル育成に関する実践例によってキャリア教育の実践と課題について考察した。その結果、コミュニケーションスキル育成に関するアクティブラーニングは、実社会から求められている能力に、おおいに貢献し得ることが考えられた。しかし、学習の効果が期待される一方で、単純に実施すればいいというものではなく、学習者の認識等を把握したうえで実施していく必要があることが考えられた(平野 2016)。

(2) 大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムを、前述の学習者の認識やアクティブラーニングなどの関連の知見や理論から、また、就職困難者(社会人)や指導する立場にある社会人たちに対するコミュニケーション能力開発に関するセミナーを複数回実施することで示唆を得てきた。これらを踏まえて、大学生に対するコミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラム(全 15 回)を設計した(以下、学習プログラムとする)。学習プログラムの全 15 回の内容を表 1 に示す。また各回の主な進行を表 2 に示す。

具体的には、次の 6 点を学習目標とした。音声表現に関する知識の獲得、音声表現に関する知識の活用(音声行動の改善)、他者に配慮した話し方の意識の向上、人前で話すことについての苦手意識の克服、自己主導性の向上、協調性の向上である。

学習プログラムに、ICE モデルや、2 回のプロジェクトを実施する協同学習を導入し、毎回、知識、学習時間内での活用、および学習時間内外でのその応用についての振り返りの機会を設けた。なお、ICE モデルの I (Ideas) は「アイデア」、C (Connections) は「つながり」、E (Extensions) は「応用」のことである。本学習プログラムでは、I を音声表現や協同学習など実践に関わる認知面とし、C では、その場で直ちに音声行動に反映させることとし、E では、後述する朗読コンサートで応用することや、他の授業や実生活の中で応用することとした。すなわち、各回を通して ICE を常に循環させる方法を採用した。また同時に、後述する 1 回目のプロ

表 1 学習プログラムの内容

1	オリエンテーション		
2	音声表現の聴き比べ		
3	音声表現の基礎と発声発音の基礎		
4	グループ演習 発表	プロジェクト 1	
5	テーマ「解釈」発表		
6	テーマ「問」発表		
7	テーマ「表現」発表		
8	朗読コンサート(1)		
9	グループ演習 朗読コンサートの準備		
10	朗読コンサートの準備		プロジェクト 2
11	朗読コンサートの準備 全体で練習		
12	リハ サル		
13	リハーサル		
14	朗読コンサート(2)		
15	音声表現の聴き比べ		

表 2 各回の主な進行

1	ノートへの記入	約 10 分
2	基礎練習「外郎売」等	約 15 分
3	講義	第 3 回 第 5~7 回 約 15 分
4	グループ演習	第 4 回~14 回
5	発表/リハーサル	40~55 分
6	ノートへの記入	約 10 分

ジェクトの経験をもとに、2 回目のプロジェクトで、それらを、各人かつグループで応用できる環境を設定した。

振り返りについては、音声表現を中心にしたコミュニケーションに関する実生活や他の授業での実践や認識などの振り返り(ノートへの記入)と、ICE を基盤にした指導者からの「問」に対する自己の考え等を記述(ノートへの記入)するようにした(表 2)。なお、このノートには、指導者とのコミュニケーションツールとしての機能ももたせた。そのため、授業者は、毎回、授業終了時に回収し、授業者は目を通してコメントを記入し、次の授業開始時に学習者に返却することとした。

第 3 回は、音声行動学習プログラムの内容を基盤に、音声に関する知見の紹介、音声と職業社会とのかかわり、基礎練習や職業場面を想定した練習などを組み込んだ。

毎回、各学習者ないしはグループ内で、音声行動の変化等を確認できるようにするため、タブレットを活用し、発表、リハーサルおよび朗読コンサート等を撮影し、その映像を視聴するようにした。

前述の毎回の音声行動等の確認とは別に、「音声表現の聴き比べ」として、表 1 のとおり、学習プログラムの第 2 回に自己と他者の音声行動(職業社会を設定しての発話、およ

び詩の朗読)を比較し、同様の内容で、第15回に自己と他者、および学習前の音声行動と学習後の音声行動の比較をするようにした。その際、タブレットを活用して動画を撮影し、第2回と第15回分の各学習者の音声行動等を各学習者が視聴して比較できるようにした。

さらに、2回のプロジェクトとして、2回の朗読コンサートの機会を設け、1回目の朗読コンサートまでは、各回でテーマを決めて15分程度の講義を入れたり、準備や練習方法を提案したりするなど授業者による支援の割合を多くし、2回目の朗読コンサートの準備からは指導者による支援を大幅に減らした。

本学習プログラムを大学生に実施し、その学習者の中から全15名にインタビュー調査をし、質的に分析をした。この結果を学会発表し、現在、その知見について論文執筆中である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計2件)

平野美保、大学におけるキャリア教育の実践と課題 アクティブラーニングによるコミュニケーションスキルの育成 職業とキャリアの教育学、査読無、21巻、2016、95-107

平野美保、柴田好章、パラ言語スキルに焦点化した個別学習教材の評価 生涯学習・キャリア教育研究、査読無、第11号、2015年、47-51

##### [学会発表](計3件)

平野美保・大谷尚・柴田好章(2014年9月21日)電気通信大学(東京都調布市)コミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの開発と評価:授業方法に対する学習者の受け止め方からみた効果、日本教育工学会第30回全国大会講演論文集、847-848  
[http://www.jset.gr.jp/taikai31/program/program\\_session.php?tp=3a#a\\_3a-A402](http://www.jset.gr.jp/taikai31/program/program_session.php?tp=3a#a_3a-A402)

平野美保・大谷尚・柴田好章(2014年9月21日)岐阜大学(岐阜県岐阜市)コミュニケーション能力向上のための音声表現スキル学習プログラムの開発と評価:ICEモデルを用いた授業デザインの検討、日本教育工学会第31回全国大会講演論文集、743-744  
[http://www.jset.gr.jp/taikai30/program/program\\_session.php?tp=P3a](http://www.jset.gr.jp/taikai30/program/program_session.php?tp=P3a)

平野美保、柴田好章(2013年9月21日)

秋田大学(秋田県秋田市)パラ言語スキルに焦点化した個別学習教材の評価、日本教育工学会第29回全国大会講演論文集、485-486

[https://www.jset.gr.jp/taikai29/program/program\\_session.php?tp=1p](https://www.jset.gr.jp/taikai29/program/program_session.php?tp=1p)

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

平野 美保(HIRANO, Miho)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・准教授

研究者番号:40631411

##### (2)連携研究者

大谷 尚(OTANI, Takashi)

名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授

研究者番号:50128162